

本論文は、〈完遂〉を表す複合動詞群が歴史的にどのような過程を経て現在の用法を獲得したのかを調査したものである。

現代語では「読み通す」「生き抜く」のような動作や行為の〈完遂〉を表す複合動詞が複数存在する。ただ、「消え通す」「食べ抜く」といった語は一般的には用いられないなど、これらの複合動詞の使い方には一定の制限が存在する。また、現代語において「刺し通す」「引き抜く」など、「通す」「抜く」を後項にとるものの、〈完遂〉ではなく物体が貫通すること、物体が別の物体を通過して抜けることなど、物理的な動きを表すものも存在する。本研究では、〈完遂〉用法が「刺し通す」など物理的な動きを表す用法から派生したことを、上代から近世の用例をもとに明らかにした。

また、現代語では複数の〈完遂〉を表す複合動詞が併存し、使い分けられているが、これらの用法がどのような歴史的競合関係を経て現代の使い分けに至ったのかは明らかでない。よって本稿では、〈完遂〉を表す複合動詞「～トオス」「～ヌク」「～ハツ」「～オワル」を対象に、個々の複合動詞が歴史的にどのような過程を経て〈完遂〉用法を獲得したのか、上代から近代の用例をもとに、特に前項動詞（「読み通す」の「読む」など）に注目して調査を行った。また、これら〈完遂〉を表す複合動詞が歴史的にどのような競合を経て現代に至ったのかを明らかにした。

第2章では、「～ヌク」の通時的調査を行った結果、「～ヌク」は〈貫通〉→〈拔出〉→〈選抜〉、〈貫通〉→〈抜駆〉→〈貫徹（完遂）〉→〈極度〉の2つの経路で用法が展開したことが分かった。また、現代語で「～ヌク」が用いられる際には〈完遂〉に伴う結果や達成感を伴う。こういった特徴は、「～ヌク」の〈完遂〉が「出し抜く」など到達点に相当する競争相手よりも優位に立つことを表す〈抜駆〉という用法から派生したために、生じたことを明らかにした。

第3章では「～トオス」の調査を行い、〈貫通〉→〈通過〉→〈一貫継続〉の順に用法派生したことが分かった。また、「～トオス」の前項には「吹く」「誦す」といった、語彙的に限界点を持たない動詞が多く、これは「～トオス」の〈完遂〉が時間的に遮られずに継続することを反映していることを指摘した。

第4章では、「～ハツ」は中古に〈動作完結（完遂）〉用法が発生したが、この用法は〈極限状態〉へと派生し、近世以降〈極限状態〉が増加するに従い、〈動作完結（完遂）〉は衰退していったことを明らかにした。

第5章では、「～オワル」は通時的に変化しないものの、近代に用例が急増することが分かった。そして、「～オワル」が増加するのは、近代に「～ハツ」が衰退し、「～オワル」が「～ハツ」に取って代わるためであると述べた。

第6章では、このような個々の複合動詞の歴史的な調査結果の比較を行った。「～トオス」「～ヌク」のように後項「トオス」「ヌク」に終了以外の語彙的な意味が存在する複合動詞は、〈完遂〉用法獲得後も後項の語彙的な意味が残存しており、達成感を伴うなど特別な状況でしか用いられないことが分かった。よって、「～トオス」「～ヌク」は使用される場面が限られているため他の複合動詞とは競合せず、現代まで使用されていると推測される。

一方、後項に終了の意味を持つ「～ハツ」「～オワル」は中立的に〈完遂〉を表す複合動詞として用い

られるが、中世から近世頃に「～ハツ」と「～オワル」は意味の衝突による競合関係を生じ、「～ハツ」に「～オワル」が取って代わられたことが分かった。この「～ハツ」と「～オワル」の交替には、「～ハツ」内部で〈完遂〉用法が衰退し、〈極限状態〉が多く用いられるようになったことと、古くは漢文訓読体で用いられていた「～オワル」が和漢混淆文やその流れを継ぐ「明治普通文」で多用されるようになったことが関わりと考えられる。

本研究により、複合動詞の〈完遂〉用法獲得過程のサンプルを示すことで、大まかに2つの傾向を見出すことができた。一つは、後項が終了以外の意味を持つ「～トオス」「～ヌク」のような複合動詞は〈完遂〉用法獲得後も後項の語彙的意味が残存し、特殊な状況においてのみ使用されるということである。二つ目は、「～ハツ」「～オワル」のように後項に終了の意味を持つ複合動詞は互いに競合し、歴史的にどちらかが淘汰される可能性があるということである。本研究は調査対象語が限られているが、他の「～オエル」「～ツクス」といった複合動詞も含め、歴史的変化の傾向を調査することで、複合動詞の通時的変化の一般化ができたのではないかと考えられる。